

水島ゼミ最終回に向けて

水島ゼミ 4 期 OB 大田

■テーマ

「水島ゼミでの“議論”とは何なのか？」— 二十数年前のゼミ活動を振り返って —

■サマリ

- 水島ゼミの 2 年間では、一般的な憲法的テーマにとどまらず広く時事的な社会問題もとりあげて議論した。テーマ選定だけでなく議論の方法/形式も様々な工夫を試み、またゼミ自体の運営についても定期的に自分たちで話し合いながら改善を重ね、常に「より有意義な学び/議論の場」のあり方を模索し続けた。
- そうした経験も踏まえ、水島ゼミでの“議論”を自分なりに(やや抽象的に)整理すると、「絶対解のない複雑な問題に対し、多種多様なバックグラウンド/価値観をもつ主体同士が、論点を設定して各々の問題意識や意見を交え/共有することで、相互理解を深めながら問題の背景や構造を多面的に掘り下げ、より本質的/根源的な論点や解決に向けた共通の方向性を見出す共創プロセス」と言える。
- このような共創プロセスは、憲法的なテーマに限らず、コミュニティが抱える様々な問題を解決する上で有効かつ不可欠。一方で日本社会はこうしたコンセプチュアルな思考/作業が苦手。ゆえに多くの問題が解決されぬまま先送りされる一因になっていると感じる。水島ゼミのような場がもっと多くの教育現場に広がり、社会全体で建設的な議論が行われ、共創プロセスが機能する未来を期待したい。

■目次

0. 自己紹介
1. 水島ゼミ 4 期の活動概要と特徴
2. 水島ゼミで学んだこと、現在活かしていること
3. “議論”の意義、社会における役割を考える

【0. 自己紹介】

水島ゼミ 4 期 OB の大田と申します。

1998 年 4 月に早稲田大学法学部に入学、1 年生時に水島先生の 1 年次用ゼミ(法学演習)を履修したことをきっかけに 3・4 年でも水島ゼミに入り、4 年生時にゼミ長を務めました。

大学卒業後に国内シンクタンクに入社して IT コンサルティング/システム構築に広く携わり、その後ベンチャー企業に参画して IT 全般/経営企画/マーケティングを担い、2018 年

に起業して現在は企業向けコンサルティング（新規事業開発、DX/事業変革、プロジェクトマネジメント、IT 部門変革・・・等々）を中心に自分でビジネスをしています。

【1. 水島ゼミ 4 期の活動概要と特徴】

<活動概要>

3 期+4 期での 2000 年 4 月～2001 年 3 月は、「憲法 9 条」「日の丸・君が代問題」「靖国参拝」等々の憲法ゼミらしいテーマから、「たばこ問題」「夫婦別姓」等々の時事系テーマもとり上げて議論しました。ゼミ合宿は、沖縄へ。また有志で広島合宿もしました。印象的だったのは、「ゼミ運営に関する定期的な話し合い」の新設。4 期メンバーが「今のゼミは、論点が定まっておらず雑談のようになっている。自分はもっとしっかりと“議論”したい」という問題提起をしたことがきっかけとなり、オフィシャルにゼミの時間を使って「どう運営していくか」をゼミ生全員で話し合う取り組みが始まりました。

4 期+5 期での 2001 年 4 月～2002 年 3 月は、応募者多数の選考を突破した個性派揃いの 5 期メンバーを迎え、より実験的・野心的に様々な「議論のあり方」を試しました。あえて立場を二分してのディベート形式、複数視点を織り交ぜながら議論をファシリテートするパネルディスカッション形式、自分事にイメージを膨らませられる演劇形式等々を採り入れ、テーマも「首相公選制」「人工妊娠中絶」「脱ダム宣言」「教科書問題」「年金制度」「安楽死」等々、巷のニュースでも目にする社会問題を積極的に扱いました。また 2001 年に「9.11」を目の当たりにし、衝撃を受けながらも「対テロ特措法」を議論した記憶があります。ゼミ合宿は長崎。有志で横田基地イベントに参加したりもしました。

<4 期の特徴>

1999 年に水島先生が日本を離れドイツで在外研究をされていたこともあり、4 期ゼミ生の応募はたしか定員割れしたように記憶しています。自由奔放でしっかりと自己主張される 3 期の先輩方に比べ、4 期メンバーはどちらかと言うと大人しく見られがちでした。実際にそのような面もあったと思います。ただし皆それぞれ内なる熱い思いや問題意識を持っており、こだわり人材が多かった印象。また人数は少ないながらも（もしくは少ないからこそ）水島ゼミとしては珍しく（？）落ち着いて協調的にゼミ運営していたように感じます。卒業後の進路は、「法曹」「マスコミ」「官僚」という「水島ゼミ的な主流路線」よりは当初から民間企業を目指すメンバーも多く、やや異色の年次だったのかもしれません。

【2. 水島ゼミで学んだこと、現在活かしていること】

<学んだこと>

水島ゼミで学んだことは多くありますが、一番は「絶対解のない難しい問題に対し、各々の問題意識や意見をぶつけながら議論することで問題の本質に迫り、未来に向けた方向性やコアな論点を導き出すことの大切さと面白さ」です。

現代社会には、国も社会も現実解を見出せていない問題が山積みです。これら「モヤモヤ

した問題」に愚直に向き合い、利害関係なく純粋な思いで仲間と議論を重ねる経験は本当に有意義で貴重でした。またあわせて、こうしたプロセスは当たり前には存在するものではなく、自分たちの不断の努力（と、その大前提としての水島先生のご理解やご支援・ご指導）によって成り立つものという実経験・肌感覚を持てたことも財産です。

<現在活かしていること>

私は現在、コンサルタントとして様々な企業の問題解決を支援しています。「問題」とは、To-Be（あるべき姿/ありたい姿）と As-Is（現状）とのギャップ。このギャップを分析/構造化して主要課題を見極め、真因を深掘りして解決の道筋をつくり実行する。こうした取り組みにおいて最も重要かつ第一歩となるのは、「To-Beを描くこと」です。ところが、多くの日本企業は実はここが弱い。スローガンの「経営理念」は額縁に飾っていても、当事者たちが具体的にイメージを共有し自分たちの言葉で語れるような明確な「あるべき姿/ありたい姿」が描けていない。だから「問題」の認識も曖昧で、課題設定もズレてしまう。Why や What をしっかりと議論/共有しないまま How の話ばかりに終始してしまい、いつの間にか手段が目的化して「間違ったことを、正しくやる」という事態に陥っているケースが非常に多いと実感しています。

この「To-Beを描く」というのは、決して楽な作業ではありません。絶対解のない中で当事者意識をもってあるべき姿/ありたい姿を描き、それを関係者で議論を重ねながら具体化して、誰もが共通の目的意識や価値判断基準をもてる状態にしていくことは、心身ともに相当のエネルギーを使います。特に日本のように「正解がある問題を効率的に解く」ことを重視する教育が根付き、異なる価値観をもつ者同士でロジカルに意見を戦わせながらコンセンサス形成していくことに慣れていない社会では尚更です。結果として本質的な議論が忌避され、重要な問題は「綺麗ごとの建前や精神論的なスローガン」で煙に巻かれて先送りとなり、気づけば手遅れになる事例が様々な領域で散見されます。

逆に言えば、水島ゼミでの議論を通じて「共創プロセス」に多少なりとも触れた経験は実は非常に貴重で、クライアント企業の変革/問題解決現場でも活かされています。「そもそも論」を議論するのが苦手なクライアント組織に第三者として入って議論をファシリテートし、モヤモヤを整理しながら To-Be イメージを引き出し共有していく役回りは、自分自身の「ビジネス×IT」の知見と掛け合わせて今の自分の強みになっていると感じています。

【3. “議論”の意義、社会における役割を考える】

仕事を通じて日本企業が抱える問題と日々向き合っていますが、これまで述べたような「建設的な議論/共創プロセスの欠如」「To-Beを描けていない状態」は、企業レベルだけでなく社会/国レベル、さらには世界レベルでも多々あると認識しています。特に、複雑性・不確実性・変化のスピードが高まっている現代においては大きなリスクと感じます。

第二次大戦後の冷戦構造が終焉して 30 年。近年の世界の動きは、これまでの西側主導の「グローバル化」が生み出した歪があちこちで亀裂を生じさせ、振り子が再び揺れ戻ろうと

しているようにも見えます。長らく続いたアメリカの覇権が揺らぐ中、世界はどのような To-Be を描き共有するのか、その中で日本はどうありたいのか。非常に難しい問題ですが避けては通れないテーマと考えています。

やや大袈裟な話にはなりましたが、こうした人類規模の問題と向き合うにあたっても、共創プロセスは不可欠です。日本の諸問題を考える上でも、「安全保障はどうあるべきか」「社会保障はどうするか」「教育はどうあるべきか」等々は、「外部環境の変化を受け、そもそも日本という国/社会はこれからどうあるべきか/どうありたいか」を問い直さないと解決に取り組むこと自体できません。

そのためには、水島ゼミのような学びの場、「苗床」がもっと広まり、社会全体で建設的な議論を軸とした共創プロセスが当たり前のように展開できる社会になって欲しいな、という思いもあります（もちろん、自分も今後の人生の中でそうした取り組みに少しでも貢献したいところです）。

ゼミ当時を振り返ると、掘り下げ切れなかった部分や勉強不足が露呈した領域、自分の考えを整理できなかったテーマ等々、反省点は多々あります。共創プロセスと言いながらも、「解決に向けた共通の方向性」が見出せぬまま消化不良に終わった回も多々あります。ただそうした点も含め、答えのない問題にまっすぐに向き合って仲間と議論するという経験は、世界の捉え方や物事の見方、自分自身の人生形成にポジティブな影響を与えるものと実体験と言えます。

最後になりましたが、今回のようなご依頼をいただき、改めて自分の考えを整理する良い機会となりました。ありがとうございました。ご依頼の趣旨にお応えできているかやや微妙ですが、少しでもゼミ最終回の議論のきっかけになれば幸いです。

以上